

<主催あいさつ>

第 30 回安房地域母親大会 実行委員長 池田 恵美子

本日、第 30 回安房地域母親大会を開催するにいたりましたことを、ご参集くださいました皆様とともに心よりお慶び申し上げます。母親大会といっても、母親という立場に限らず、老若男女だれもが参加でき、話し合うことのできる集いです。よりよい地域社会づくりを目ざして第 1 回大会が 1996 年に開かれて以来、様々な課題と向き合いながら、途切れることなく 30 年間継続してこられた歴代の実行委員の皆様にご敬意を表しております。

房総半島南端の安房地域は、南北逆さに地図を見ても、弧を描いた日本列島の頂点に位置しています。古くから海路を通じて太平洋世界の人びとと 交流・共生し、つながって来た歴史があります。また、支配権力の影響を受けた地でもあり、多くの戦争遺跡や中世城跡はその象徴といえます。とくに 1945 年 9 月 3 日には米占領軍が 上陸し、館山は本土で唯一「直接軍政」が 4 日間敷かれ、戦後日本のスタートの地となりました。また安房地域には、「噫従軍慰安婦」碑、「名も無き女の碑」、「日中友好」の碑、江戸初期にハングル旧字体が刻まれた平和祈念の「四面石塔」、日米・日韓の移民交流史など、平和・交流・共生を育んだ歴史も多くのこっており、平和学習を学ぶ教材に事欠きません。

私は 2000 年に生まれ故郷の館山に戻り、2004 年に NPO 法人安房文化遺産フォーラムを設立し、戦跡ガイドなどの教育支援とまちづくり活動をおこなってきました。戦後 60 年を迎えた 2005 年に「南房総平和フェスティバル」というネットワークの企画を立てて、安房地域母親大会と連携を図りました。同年は日韓国交正常化 40 年（日韓友情年）でもあり、NPO では韓国の子どもたちをホームステイで受け入れる交流事業をおこなったのですが、安房地域母親大会から 4 万円余りの募金をご支援いただきました。それ以来 20 年にわたり、私は実行委員として関わってまいりました。

私の半生をふりかえれば、今の活動に導いてくださったのは、館山白百合学園創設者の島野初子先生と次女の高橋潮先生だったといえます。「これからは女性も国際的な視野をもつことが大事」と私の両親を指導し、私に様々な体験をさせてくれました。その一つは 12 歳で参加したハワイのジュニアスクールでした。この経験が、学校外の教育を志し、今の活動につながる原点となりました。その島野初子先生（旧姓矢部）は、1920 年に平塚らいてうさんとともに新婦人協会を設立し、1923 年 3 月 8 日には日本初の国際婦人デーの集いを主催し、開会の辞を担当しているのです。

それから 100 年を経て、記念すべき第 30 回安房地域母親大会の実行委員長を私が仰せつかっておりますことを、心より光栄に存じます。そして奇しくも、本大会は「100 年後の子どもたちに希望を手わたそう！」というテーマで開催いたします。100 年先の未来を見つめ、「安房大神宮の森コモンプロジェクト」を展開している高田宏臣さんと、平和を生み出す「哲学対話」を推進している永井玲衣さんをお招きし、皆さんとともに安房の未来を創作する機会を開催できることはこの上ない喜びです。戦後 80 年の幕開けにふさわしい 1 日、ともに過ごしましょう。

<祝辞>

千葉県母親連絡会 会長 渡辺 京子

本日は記念すべき第30回安房地域母親大会の開催、まことにおめでとうございます。

昨年元旦の能登半島大地震、津波があり、いまだ苦難の生活をされている方々に心よりお見舞い申し上げたいと思います。前回安房に伺った時は2019年の房総半島台風のあとで、家々の屋根にまだ空色のビニールシートがかけてあるという痛ましい光景がありました。ひとたび大きい災害があれば、たいへんな状況になるこの国ですが、安房の皆さんは明るくお元気に私達を迎えてくださいました。

また館山で皆様に貴重な戦跡をご案内いただき、赤山地下壕、掩体壕、「かにた婦人の村」などを見学させていただきました。一番衝撃を受けたのは特攻艇のお話でした。若い兵士と片道のガソリンを乗せただけの、ベニヤ一枚で作られた小舟が敵の軍艦に突撃するという使命をもってこの館山で出撃準備をしていたということです。この作戦は、終戦となり実行されなかったそうですが、未来ある若者の命がこのように失われていいわけはありません。

広島、長崎への原爆投下、そしてアメリカのビキニ環礁での水爆実験による第5福竜丸はじめ多くのまぐろ漁船の被曝と、三たびの核兵器の被害に、平塚らいてふら日本の母親・女性達は立ち上がりました。世界に「核戦争から子どもたちを守りましょう」と呼びかけ、世界母親大会がスイスで開催されました。日本から49人もの女性が参加しました。その大会にギリシャの詩人が寄せた詩の一節が「生命を生み出す母親は 生命を守り 生命をも守ることをのぞみます」という私たちのスローガンになっています。

同じ頃、第1回日本母親大会が東京で開催されました。約2,000人の母親・女性が日本中から集まり、戦争で夫や息子を失った女性なども参加し、戦後の暮らしの窮状を涙ながらに訴え、泣き親大会と言われました。以来脈々と母親大会は続き、今日に至っています。全国各県や市・地域でも、さまざまな独自のテーマを掲げて母親大会が行われてきました。昨年暮れには、日本被爆者団体協議会がノーベル平和賞を受賞しました。被団協の皆さんは、悲惨な体験をされた方々だからこそ知っている原水爆被害の恐ろしさを、世界に広めてくださいました。

そして、本日の第30回安房地域母親大会では、「100年後の子どもたちに希望を手渡そう」というすてきな企画で、高田宏臣さんと永井玲衣さん、お2人のすばらしい講師のお話や、市民活動のご紹介など、勉強させていただきたいと思ってまいりました。

戦後80年にあたる今秋には、東京で第70回日本母親大会が、この館山市で第67回千葉県母親大会と第31回安房地域母親大会が共催で開かれます。両大会にお誘いあわせて、是非ご参加ください。どうぞよろしく申し上げます。

安房地域の皆さま、お集りの皆様のご健康とご活躍をお祈りしてお祝いの挨拶とさせていただきます。